

みんなでお片付け!

幼児の姿と教師のかかわり

幼児は積木を使って遊ぶのが大好きである。しかし、一定の場所にたくさんの積木を四角に積み重ねて片付けるのは4歳児にはまだ難しい。入園当初、教師が中心となって、いくつかのコツを伝えながら一緒に片付けることで、自分たちでも片付けられるようにした。また、一緒にやりながら、「このまま散らかっていたら、誰かがころんでしまうね。」「このままだと、次に遊ぶとき大変だね。」と、なぜ片付けることが必要か伝えたり、「きれいに片付けると気持ちいい。」「片付けはみんなでやったほうが早い。」という気持ちもてるように言葉や行動で伝えた。



6月に入って、自分たちで片付けることも少しずつできるようになってきた。Y男、D男、R男は積木で電車を作るのが大好きである。中心となって積木の片付けもするY男。ある日、Y男が中心になって進めていたとき、「小さいのは後。」ともってくる子に怒りながら注意している。Y男の見ていない所に勝手に置くと、「ここはだめ。」「まだだよ。」と大声で怒るので、積木をどこにもおけず、何人かは片付けをやめて遊び始めた。「Y君が置かないでってあんまり怒るから、どこに置くかわからなくなって困っているみたいだよ。」「だって、みんなが勝手に置くんだもん。」「怒ってダメダメって言わないで、Y君は上手な片付け方を知ってるんだから、みんなに、やさしく教えてあげたり、直してあげたりして一緒に片付けたら。」とY男の気持ちを聞きながら話をした。すると、ふてくされながらも「穴ぼこが空かないようにするの。」と教えていた。教師と一緒によく片付けをしていたので、Y男は積木の片付け方を知っているが、Y男には一人でやるよりもみんなでやったほうが早い、協力してやる方がうまくいくということを知ってほしかった。

6月下旬、Y男だけが中心だった積木の片付けも、R男、M男も一緒になって他の幼児が持ってきた積木を隙間を作らないように置いている。M男が「三角と三角は合体して四角にするんだよ。」と三角が見えるように合体した四角を置き、M男も片付けの仕方を覚えて教える姿が見られた。Y男がいろいろ指示するなかで、まわりの幼児もやり方を覚え、M男のように、別の幼児に伝えていた。教師もいつでも手伝うのではなく、見守ったり、ほめたり、考えさせたりと幼児の成長と共に援助やかかわり方を変えていかなければならない。

気付いた点

- ・なぜ片付けをするか伝えていかなければ、いつまでも言われて片付けることしかできないので、片付けの大切さを理解し、やろうとする気持ちをもたせることが自分からやろうとする子を育てると思う。
- ・片付けのなかでたくさんのことを学ぶことができる。積木は三角や四角があること、三角を二つ合わせると四角になることなどに気付き、図形を覚えたり、図形に関心をもったりすることができる。また、一人でもてない大きい積木は友達と一緒にもてばいいなど考えたりすることができ、友達と力をあわせることもできるようになる。それらのことを教師がすべて教えこむのではなく、遊びながら気付かせたりしていくことが大切である。
- ・一人で片付けることも大切であるが、みんなでやろうとすること、みんなでやれば片付けやすいということ伝えて、気付かせることで、みんなで役割を分担することができるようになると思う。

事例2 2年保育4歳児5月中旬

どうして仲間に入れてあげないの? 『S子ちゃんはだめ!』

幼児の姿と教師のかかわり

幼児たちはいつものように砂場で膝まで埋め込んで感触を味わったり、バケツに砂を入れてご馳走を作ったり、穴を掘って水を流しこんだりなどの遊びをしていた。M子、L子、A子たちがテーブルにお皿やお碗を並べてご馳走作りをはじめた。この日もM子が中心になってジュースを作ったりごちそうを作ったりしてまわりの幼児たちはそれができるのを待っていた。そこへ、普段、一人で遊ぶことの多いS子がやってきて、M子たちの遊びに興味をもち、仲間に入りたそうにしていた。



S子は自分からあまり言葉を発しない子だったため、きっかけをつかめないでいるのだと思い、教師がM子たちに「ねえ、S子ちゃんが仲間に入りたんだって!入れてくれる?」と聞くと、M子はあまりいい顔はしないで、「ええ!だって座れないよ」と言ったので、S子と一緒に椅子を探して仲間に入れてもらうことにした。S子はさっそくご馳走を食べようとお皿に手をもっていくと、すぐ様M子が「ダメ!」というので、今度はペットボトルをもってコップにつごうとしたが、「まだダメ!今作ってるんだから」と強く言われてしまった。S子は待っているのがつまらなかったのか砂が付いた両足をテーブルの上にのせた。隣でそれを見ていたM子は「だからS子ちゃんはいやなんだ」とかなり言葉を荒立てて怒鳴った。まわりの子も二人の会話に言葉を失った様子だった。そこで教師が二人の間に入ってお互いの気持ちを伝えるようにしたところM子もS子も一応は納得したようだった。その後、他の幼児が仲間に入りたそうにしているとA子が椅子を持ってきてあげたり、Y子が場所を譲ったりしていた。またS子には「待ってなね、もうすぐできるから」となだめるT子の姿があった。教師が「よかったね。M子ちゃん、おいしいジュースができるかな?S子ちゃんがとっても楽しみにしているよ」と言葉をかけると、嬉しそうに「待って!オレンジジュースができるから」と答えていた。

気付いた点

- ・すべてにおいて行動がマイペースで、一人で遊ぶことが多く、生活に必要な言葉や態度がまだ育っていないS子と、自己主張が強く、自分が中心になって遊びを進めたがるM子の二人の性格の違いから起こったと思う。その二人の性格や行動の違いを教師がよく理解し、受けとめた上で、心情を汲み取り、その子やその場に合った言葉をかけてあげることがとても大切だと感じた。
- ・M子の主張が強く、まわりの幼児が気持ちを抑えて遊ぶことが多かったが、教師が二人の気持ちを受けとめ、相手にも思いがあることを代弁したことによって、M子はS子の気持ちに改めて気付いたり、S子も無意識にやっていた行動をいけないことだと気付いたりして、それぞれが自分の気持ちを振り返って考えることができた。
- ・教師のM子、S子に対するかかわり方を見て、まわりにいた幼児たちも仲間に入りたいと思っている幼児にやさしく声をかけてあげたり、場所を譲ったりしてあげるなど、他の幼児に対して気遣う心の変容が見られた。

事例3 2年保育4歳児6月中旬

言葉で伝えて!

幼児の姿と教師のかかわり

おままごとコーナーで、K男や女児3人くらいがご飯を用意したりして遊んでいる。女児が犬の人形を抱いて遊んでいるのを見て、K男はほしくなり、H子もっている人形をつかんでとろうとするが、放さなかったため、K男はH子をたたいた。



K男は普段から気に入らないことやほしいものがあるときに、手や足が出てしまう。「ぶったー」「たたいた」などと他の幼児からでてくることがしばしばである。友達と一緒に遊ぶには、「かして」「まって」「ごめんね」と言葉で伝えていかなければ楽しく遊べない。こうしたトラブルを通して、言葉で伝えることの大切さをわかってほしいと思い、「お口で言わないとわからないよ。」「お話できるお口があるでしょう。」ということ伝えてきた。

H子が「先生、Kちゃんがぶった。」と言い、「Kちゃん、たたいたの?」「どうして?」と声をかけると、K男は無言で下をむいた。「Kちゃんはこのワンちゃんを使いたかったの?」と聞く。しばらくして「うん。」と答えた。「ねえ、使いたいときは、とったり、ぶったりしないで、どうしたらいいの?」とまわりの子にも一緒に話しかけると、T子が「貸してっていうんだよ。」「そうね。貸してって言うといいね。Kちゃんもお話できるよね。お友達に貸してって聞いてごらん。」と促した。

「かして。」とK男が言うと、今度はH子が何も答えない。「Hちゃん、Kちゃんが聞いているよ。どうする?」それでも黙ってうつむいたままである。「貸したくないのかな?」H子は頷く。「でも、この人形をKちゃんが遊びたいのもわかるかな?H子ちゃんと同じようにこのお人形で遊びたいんだね。じゃあ、すぐに貸してあげられなかったら『終わったら貸してあげるね。』って言ってあげたら?」とH子のまだ遊びたいという気持ちを受け止めながら、K男も同じ気持ちであることを伝えた。

教師は、H子たちがK男への悪いイメージから貸してあげるか不安もあったので「でもね、Kちゃん、もしお約束して、なかなか終わらなかったら、『まだ??』って聞いていいんだよ。」と、伝える。しばらくして、K男が笑いながら、H子に「貸して。」と聞くと、H子「いいよ。」と、人形を渡しながら大声で笑いあった。教師は「Kちゃん、お口で言えたねH子ちゃんもお約束したとおりに貸すことができたのね。」と二人をほめた。

気付いた点

- ・K男は、言葉で伝えると気持ちよく遊べることを感じ始めている。そのことをもっと実感することが必要であり、教師はK男の様子を見守り、伝えられたときには認めて、ほめたり、なかなか言葉がでないときには一緒に考えたりすることが大切だと感じた。
- ・言葉は知っていても、伝える勇気が出ないことも多い。幼児の思いを読み取り、どう思っていて、どうしたいのかわちんとわかってあげたり、幼児には見えていない相手の思いを伝えてあげたりすることが教師は必要である。教師の声かけで友達に話しかける勇気が出たり、相手の思いを知ることができるので、教師は幼児の行動を見守り、心をくみとることが必要である。
- ・遊びのなかのトラブルを通して、まわりの子の気持ちを知ろうとしたり、考えたりして、みんなで解決しようとする気持ちや相手を思いやったりする心が育ってくれるのではないかと思う。

事例4 2年保育4歳児10月中旬

友達と一緒に楽しいな『忍者の修行ごっこ』

幼児の姿と教師のかかわり

5,6人の 男児が砂場の近くの滑り台を利用して、そこを岩にして何か技を掛けながら降りてきたり、よじ登ったりして遊んでいた。その幼児たちの動きをみて、教師が思わず「かっこいいね、忍者みたい。」というと、Y夫が「忍者ってこうやって術をかけるんだよ」と指を組んで忍者の真似をする。するとそれに習ってM男やS男たちもすっかり忍者の気分になってやってみせた。その姿を見て女兒も興味を示した。忍者の話で盛り上がっているとY夫が「先生、忍者は修行をするんだよ」と言ったので「修業ってどんなこと？」と関心を示すと、Y夫は坂を転げ落ちたり、芝生の上をでんぐり返しをしたりしてみせた。他の幼児も「ぼくだって修業する」と遊びに加わり得意な側転をしたり、滑り台を掛け登ったり、植込に隠れたりしてみせた。また「忍者ってさ、音を立てないで走るんだよ」といって小走りに走ったり、ジャンプして砂場に飛び込んだり、太鼓橋、チェーンネット、ジャングルジムなどの固定遊具を利用して登ったり渡ったりなど、一人の幼児の修業という言葉からいろいろな忍者の動きがうまれた。



翌日、遊びがよりおもしろくなるというなど考え、みんなでビデオ“つくってあそぼ：忍者でござる”を視聴した。視聴後、ワクワクさんをまねて、新聞紙を使って手裏剣や刀を作ったり、さらに忍者らしくなれるように教師がカラーポリ袋の忍者服を作ってあげると、喜んでそれを身に付け、作った刀や手裏剣を持ち、すっかり忍者に変身して遊んでいた。他の幼児も「ぼくも作りたい」「わたしも作って」と興味をもち、たくさんの幼児が遊びに加わった。その後、園庭に出て教師と一緒に修業のコースをつくり、それぞれの幼児が思い思いにタイヤ飛びやけんけん飛びをしたり、築山を寝転がって降りたり側転をしたりしていろいろな修業ごっこの表現をしながら友達と一緒に体を思いきり動かして遊ぶことを楽しんでいた。

気付いた点

- ・教師の言葉かけひとつで幼児の心を動かし、遊びを生み出したり、遊びに興味が湧いたり、イメージが膨らんだりして友達と一緒に楽しく遊ぶことができた。それには普段から幼児との信頼関係を築き、かかわっていくなかで教師の態度や受けとめが重要であると感じた。
- ・小道具や洋服があるとそのものになりきって遊べるので、予想して材料を用意しておくことも遊びを発展させていく大事な環境のひとつであると思った。
- ・身体を動かす遊びやルールのある遊びに興味をもってきた頃に、教師が“忍者の修行ごっこ”の遊びを取り入れ、飛ぶ、走る、転がる、渡るなどの運動遊びも組み込まれ変化に富んだ環境を用意したことから、友達とのかかわりができ、一緒に遊ぶ楽しさを感じることができたと思う。
- ・教師は、幼児の興味や発達、運動機能等を十分考慮して環境を用意していくことがその遊びを盛り上げる要因になると思う。

ルールを守ろう

幼児の姿と教師のかかわり

幼児たちの間で、“転がしドッジボール”の遊びが始まっていた。円を描き、円の外からボールを投げ円の中にいる幼児がボールに当たったら円の外に出る、という簡単な遊びである。

この日も、クラスの半分くらいの幼児が転がしドッジボールに興味をもちはじめ、友達や教師と一緒に遊んでいた。その中には、自分の思いが通らないとすぐに友達をたたいたり、ぶったりする幼児、Y男も加わっていた。また、転がしドッジボールのルールがよくわからないK男もいた。Y男がボールに当たり円の外に出て、Y男は自分の所にボールが来るのを待っている。その隣には、Y男と同じようにK男が立っていた。そこへ待ちに待ったボールが2人の元へ転がってきた。2人は「ボールがきた！」と思い、ボールにとびついた。Y男もK男もほとんど同時に、ボールに手を出した。Y男は「何するんだよ。僕が先にボール取ったんだよ！」とK男にいい、「違うよ！僕が先だったんだよ！」と大声を出してボールの取り合いが始まった。普段から2人はボールの取り合いでトラブルを起こし、その都度、教師が仲裁に入り、お互いの思いを聞いたり、伝えたりしてきた。しかし、いつまでも教師が仲裁してばかりでなく、そろそろ2人で、周りの幼児から刺激を受けながら解決できるようにしたいと思い、しばらく様子を見守ることにした。ボールはいつまでもY男とK男の手の中にあり、ゲームは始まらない。他の幼児もそれを見てどうしたらよいか分からない幼児もいれば、「早くしてよ。」と、ゲーム再開を促す幼児もいた。教師がここで幼児たちがスムーズに遊べるようにルールを決めたり、教え込んだりしてゲームを再開させることは易しいことだろう。しかし、幼児たちがどうしたら楽しく友達と一緒に遊べるのだろうか？と考えたり、悩んだり、またルールを守りながら遊ぶ大切さにも気付くために教師は、「Y男君、K男君みんなが待っているよ。いつまでもボールのとりっこをされていていいのかなあ？どうしたらいいの？」と声をかけた。すると、M男が「じゃんけんして決めれば？」と提案した。教師は「それはいいアイデアだね。」と、M男の提案を認めるようにしたところ、Y男とK男は2人でじゃんけんをはじめ、K男が勝ちゲームが再開された。じゃんけんに負けたY男は、ボールを投げられなかったことに悔しい表情をみせたので、教師はY男に「お友達にボールを譲って偉かったね。」と誉めた。Y男は「うん。」とうなずき、表情も和らぎ、最後まで転がしドッジボールをして遊んだ。

その後、ボールの取り合いが起こるたびに、幼児同士でじゃんけんを行い、勝った人が投げられるというルールが確立し、それを守りながら遊べるようになっていった。



気付いた点

- ・男児2人のボールの取り合いからゲームが中断した時、教師がすぐに仲裁せず見守ることで幼児たちはゲームを中断すると「つまらない。」ということを感じ、どうしたら楽しく遊べるのかと自分たちで知恵をだし、遊びが再開できるように考えることで、友達の意見も受け入れられるようになった。
- ・Y男やK男は、みんなから「早くしてよ！」と指摘されることや、みんなが待っているということで、「自分ばかり勝手なことをしていたのではいけない。」ということに気付く、いいきっかけだったのではないと思う。
- ・M男のじゃんけんの提案を認めたことで、他の幼児たちもルールの大切さに気付き、ルールを守りながら遊ぶと楽しいということが分かってきたのだと思う。
- ・Y男がじゃんけんに負けた時に、K男にボールを譲る気持ちを誉めたことで、我慢することの大切さに気付くことができた。また、みんなと一緒にゲームをする楽しさがわかってきたので、最後まで転がしドッジボールをして遊んでいたのではないか。この時期は我慢する心や最後までやり通そうとする心の育つ時期であることから、保護者と連携をとり、協力を得ながら幼児の心を育てていくことも大切であると思う。

事例6 2年保育4歳児2月頃～5歳児6月頃まで

ルールを変えると楽しいね！

幼児の姿と教師のかかわり

4歳児の2月頃、幼児たちの中で“転がしドッジボール”が人気のある遊びの一つとなっており、友達と一緒にルールを守りながら遊んでいる姿がよく見られた。



ある日、うさぎ組の幼児数名が転がしドッジボールを楽しんでいた。後からりす組の幼児数名が自分のクラスのボールをもって「仲間に入れて。」とやってきた。うさぎ組の幼児たちが「いいよ。」というとりす組のY男が持っていたボールをいきなり投げ始めた。そのことからボールが1個から2個で行う転がしドッジボールが始まった。その際に教師は、幼児の動きや、幼児が転がしドッジボールのルールが分かっているかなどの状況を把握し、2個のボールを使った転がしドッジボールのルールを認めるようにしていった。幼児たちは「きゃー！」といいながら、ボールに当たらないように逃げ回ったり、円の外にいる幼児は、ボールを一生懸命に取ろうとしたりして、ボールが2個になったことで動きが活発になった。そこで教師は、友達とぶつかり合う危険性が予測されたので幼児の動きを見ながら円の大きさを変えた。また、ボールが急に2個になってしまい戸惑っている幼児には、「○○ちゃん、ほら、後ろからもボールがくるよ！」「○○ちゃん、今当たっちゃったね。」と声をかけ遊びが盛り上がるようにした。その後、幼児たちの中で、2個のボールを使った転がしドッジボールが白熱していき、楽しく遊んでいた。

4歳児の3月頃には、5歳児が行っている“ドッジボール”をする姿を見て、おもしろそう、やってみたいと思い、「仲間に入れて。」と年長児に話しかけている幼児の姿も見られるようになった。仲間に入れてもらった年少児は、好きなチームに入れてもらい、ボールは取らずに逃げ回ったり、ボールに当たった時には、線の外に出る事は分かっても、どこに出ればいいのか分からずに戸惑っている姿が見られた。しかし、年長児に「○○ちゃんはあっちに出るんだよ。」「○○ちゃんは、当たったから外に出るんだよ。」などと優しく教えてもらい、両学年で遊んでいる様子が見られた。4歳児は5歳児への憧れの気持ちをもって、自分たちも大きい組の遊びをやってみたいと思っているので、教師はこうした幼児の素朴な気持ちを大切にするようにした。また、年少児と年長児が関わっている様子を温かく見守るようにしながら、年長児に教えてもらったがよく分からずいたり、ルールを無視したりしている幼児に対して、必要に応じてルールを分かりやすく話しをし、幼児たちと一緒にドッジボールをして遊びながら伝えていくようにした。年長児と一緒にドッジボールをすることで、だんだんとルールが分かるようになり、その後、年少児だけで2チームに別れてゲームを楽しむ様子も見られるようになってきた。

年長児になると、「一緒にドッジボールをして遊ぼうよ。」と友達同士で誘い合って一緒に楽しむ姿が見られた。チーム分けも2人組になってじゃんけんをし、「勝った人は、こっちチーム」「負けた人は、あっちチーム」と自分たちでゲームを進められるようになり、自分のチームが負けそうになった時は「○○ちゃん、がんばれ！」と応援したりして、友達と一緒に遊ぶ楽しさとルールを守る中で勝敗をつけるおもしろさもわかるようになってきた。

気付いた点

- ・ボールが1個から2個へと偶発的に始まった新しいルールだったが、教師が「危ないから駄目だよ。」と否定するのではなく、認めたことで幼児は、「ルールを変えるとおもしろいな。」ということに気付いたり、ボールがどこからとんでくるか分からないドキドキ感もあったりして、遊びが盛り上がり持続して楽しむことができたのだと思う。
- ・ボールが2個になったことで、円の中の幼児は、ボールから逃げるための敏捷性がついたり、円の外にいる幼児は、ボールに触れる機会も増え、ボールをとることが上手になったり、円を大きくしたことから投力もつくようになった。このように幼児の様子に応じて環境を変化させることが幼児の成長を促すのに大切であると思う。
- ・5歳児と一緒に遊び、転がしドッジボールからドッジボールへとゲームが変化したことで、より遊びがおもしろくなったり、ルールを守って遊ぶことの大切さがわかってきた。それは、遊びの様々な場面で葛藤を繰り返しながら、友達の意見を受け入れる心も育ってきたからだと思う。

事例7 2年保育5歳児6月下旬

友達と一緒に作ろう

幼児の姿と教師のかかわり

空き箱を使って作ることが大好きな幼児たちはこの頃、自動車を作って遊ぶ姿がよく見られた。自分の思いを出して車を作っていたが、動かない車に物足りなさを感じ、遊びが停滞してきているようなので「つくってあそび乗り物工場」のビデオを視聴することでそこからヒントを得てより楽しく遊ぶことができるのではないかと考え、みんなで視聴した。視聴後、各自

のイメージでワクワクさんのまねをしながら片ダンボールを丸めて動く自動車づくりを始めた。一人ではできない子には「やってあげるよ」と声を掛けたり友達同士で教え合ったりしながら作る姿が見られた。車ができあがり、友達と競争して楽しんでいるとK子が「先生、みんなで街を作りたい!」と言った。「Kちゃんいい考えね」とK子の発想を認め、他の幼児にも伝えた。この遊びをきっかけにクラスみんなで遊べるといいなと考え幼児と一緒に街づくりに必要な材料を用意し作り始めた。Y子は「信号の色が変わるようにしたい」というので幼児の思いを受けとめ教師も一緒に工夫しながら作った。友達の良さにも気づき刺激し合えるように「Yちゃんは信号が変わるようにしたんだって。すごいね。」と褒めたり「TちゃんとSちゃんは分担して作っているよ」と周りの幼児に広めた。街づくりが進む中で普段から友達とトラブルの多い女児3名が途中で抜けていった。日頃から自己中心的な行動が多いので他の幼児がどのような反応をするのか様子を見た。抜けたことに他の幼児たちも気づき、何人かずつ順番に3人の所に行っては「一緒に作ろうよ」「みんなでやらないとできないよ」と誘いかけていた。そこで、他の幼児のみんで作りたいという思いやみんなで協力して作る大切さに気付くように話しをした。子どもたちは意欲的に取り組み「ガタガタ道も作ろう」「T君の作ったおうちにはカーテンもあるよ。すごい」と友達の良さを認め、出来上がった街に作ったパトカーやショベルカーを走らせたりして遊び始めた。遊びがより楽しくなるように救急車などの効果音を流し「どこかで事故みたいです」と声をかけると「どこですか?」と事故現場を探したり、「救急車は赤でも走れるんだよ」といいながら走らせ自分たちでいろいろな場面を考えながら遊んでいた。



気付いた点

- ・ 幼児の気持ちを受け止めたり、見守ったり、必要に応じて援助したりすることで車づくりだけでなく街づくりにも興味を示し、クラスみんなで「街を作ろう」という目的に向かっての一体感が出てきたように感じた。上手く入れずに抜けてしまう幼児も見られたが、他の幼児が誘いかけクラスの仲間意識が育ってきたように思う。
- ・ 友達同士で協力したり刺激し合ったり、アイデアを出し合ったりしながら遊ぶためには教師の援助のタイミングが大切であると感じた。
- ・ 街づくりになったことでいろいろな友達とのかかわりが増え、みんなで作り上げた充実感、達成感が味わえていたようだった。

事例8 2年保育5歳児7月

いっぱいとれたよ！

幼児の姿と教師のかかわり

年長組に進級した幼児は3月に植えたじゃがいもが気になり、朝、登園してくるとじゃがいもの芽の出たところに「こっちはまだ小さいなー」と言いながら水をあげ収穫を期待して世話をしていた。植物は水をあげたり雑草を抜いたり、肥料をあげたりしてまめに世話をしないと大きく育たないことに気付かせ

ると、雑草を見つけては「栄養を摂られちゃうんだよ」「大変だ！！」と言いながらみんなで抜くようになった。また、ありや虫を見つけるとありさんのおはなしと歌を口ずさんだり、図鑑で虫を調べたりしていた。あまり畑に興味のない幼児たちにも植物の生長に興味をもってほしいと思い、よく世話をしている幼児たちに畑の様子をみんなに知らせる機会を設け畑に興味を設けた。そのうちに花が咲き始めると「あっ、花が咲いてるよ」「わあー。白いんだね」「こっちも咲いているよ」ととても嬉しそうだった。子どもたちがじゃがいものちょっとした変化にも目を輝かせている姿を受けとめ、共感するようにしていった。また、遊んだ後に「じゃがいも大きくなっているかな？」と伝えることで興味や関心が持続するようにした。この頃になると「中のおいもはどのくらいかな？」「きっと大きいよ」と期待も高まってきた。しばらくするとじゃがいもが土の表面に顔を出し始めた。「わあー。じゃがいもができてるよー！」「ほんとだっ」とみんな大喜び。「じゃあ、少しだけ掘ってみよう」と声をかけ子どもたちと一緒に掘ってみると大きいのがみつかった。「できてる！」「大きいね、早く掘ろうよ」と早く収穫したいという気持ちが高まった。

そして翌日、大きいじゃがいもを期待してみんなで掘り始めた。「こんなに大きいのが採れたよ」「僕だって大きいよ」と友達同士で比べっこをしたり、形を見比べたりしていた。「たくさんのじゃがいもが採れたね。みんなが一生懸命に世話をしてきたからだよ」「まだ、土の中にあるかもしれないね。よく探してみてごらん？」と話す中、土で汚れることも気にせず土を掘り返し「あったよ」「ここにはないや」と畑を耕していた。「たくさんとれたね」「早く食べたいな」「先生、小さい組にもあげようよ」と年少組のことも思いやる気持ちが見られたことを嬉しく思い「年少さんもきっと喜ぶよ。みんなで一緒に食べようね」と収穫を喜ぶ心を大切に受けとめた。



気付いた点

- ・毎日続けて世話をしてきたことで、自分たちのじゃがいもという特別な思いがし、大きく育つようにたっぷり水をあげたり雑草を抜いたりして優しい気持ちで世話をし生長を見守る事ができたように思う。
- ・たくさんのじゃがいもに感動し、収穫の喜びを満喫すると自然に自分たちだけでなく分けてあげたいという気持ちになるのだと思う。
- ・教師自身が感性豊かであり、また優しい気持ちで植物に接していくことで幼児も感性や優しさが自然と芽生えてくるのではないかと思う。教師はよきモデルとなるように努めることが大切であると感じた。